

冷たさと痛み

## 冷たさと痛み

—— ジナイーダ・ギッピウスの皮膚の感覚（書簡と初期抒情詩より） ——

草 野 慶 子

### はじめに——「皮膚の下」の洞察

ジナイーダ・ギッピウス（1869-1945）と、ドミートリー・フィロソフ（1872-1940）との関係は文学史上よく知られている。ギッピウスとその夫、高名な作家・思想家であったドミートリー・メレシコフスキー（1866-1941）が、当時若き批評家であったフィロソフを含めた三者で、ある特別な契りを結んだのが1901年3月のこと。教会の婚儀を模したオリジナルの儀式によって結ばれたその契りは、ポリガミーの実践というよりも、いやまさしく性的な結びつきを確信的に排除した、宗教的な「事業」「Дело」とそれは、ギッピウスによって呼ばれた）であった。三者の契りが、社会において新しい宗教意識の覚醒を促すようにと企図されたものであった。

これには、ギッピウスが生涯、性への強い忌避感を抱き続け、その結婚生活は様々な理由から肉体関係を伴わないものであり、そしてフィロソフはホモセクシュアルの男性であったという、宗教的な意図とはとりあえず区別すべき個人的な背景があったことも言い添えねばならないだろう。こうした背景なしに、この契りはありえなかっただろう。しかし「事業」を記録する彼女の日記形式の手記『過去について』（«О бывшем»（1899-1914））には、フィロソフへの愛、より正確に言えば、フィロソフへの精神的かつ肉体的な欲望をめぐる葛藤が記されている。そしてこの個人的葛藤は、愛と性の未来を見据えたユートピア的なヴィジョンへと展開していく。これらの点、つまりギッピウス自身のセクシュアリティの表現とその創作、思想とのかかわり、先行するあるいは同時代の性愛論との連関については少なからずの研究があり、論者もまた、考察を行っている<sup>(1)</sup>。

同じことはフィロソフ宛の書簡についても言え、本稿でまず考察対象となるのは書簡である。具体的には、1905年ごろの書簡においてギッピウスが両者の関係、フィロソフへの欲望に言及する際に多用する「冷たさ」「熱さ」及びその類義表現、周辺の語彙に注目し、関連する評論作品をも参照する。さらに、同時期の抒情詩をも分析する。「冷」「熱」といった皮膚の感覚が、いかにこの時期のギッピウスの性愛論、そして詩学と美学に生きているのかを、論じる。皮膚の感覚とはまた、「痛み」をもその重要な要素とする。よって心身の「痛み」の表出にも敏感でありたい。

1905年9月1日付フィロソフ宛書簡には、подкожный という「皮膚下の」と訳すべき形容詞の変化形が二度使われている。「つまり、皮膚の下で подкожно 理解することが大事」「共有可能な、感覚がもたらす〈皮膚の下〉подкожные 思考」(82,85 〈 〉内は原文引用符付き強調語彙)<sup>(2)</sup>といった具合である。前者は神の権力について論じる部分で、後者は、孤立した空理空論に陥る思考スタイルと対置する文脈で使われている。

また『過去について』中の1908年の記述には、「大事なことは、皮膚の下で подкожно 理解するに至ったある考えを私が始終抱いていたこと、つまり、1、2、3にすべてがあるということ」(Гиппиус 1999. 133)とある。ギッピウスにとって極めて重大な「3」の公理、あるいはシンボリカ——三者の契り、「事業」にもそれはあらわれている——をめぐる議論はとりあえずおくとして、ここでも「皮膚の下」が、書簡におけるのと同様に、特権的な洞察を語るキーワードとなっていることがうかがえる。翻って「皮膚の上」ないし皮膚から遊離した思考や洞察は、少なくともこの文脈では重んじられないということになる。

皮膚という、自己と他者をわかつ境界は、ここでさらに、いかなるものの臨界点となり、またその表面になにを帯電させているのだろうか。

## 1. 私のなかの冷たい火傷——書簡を読む

1905年7月16日付フィロソフ宛の、長い書簡に頻出する「冷」「熱」に関する表現は、むろん主として皮膚の感覚に属するものだが、これらはまずギッピウス自身を定義するために使われ、そしてはっきりと、性的な事柄を語るためのものである。同時に、メレシコフスキーを含めた三人の「事業」、その実践を支えた思想の深化に伴う混乱と苦悩を、伝える。以下、詳しく読みといていこう。なお書簡ではさまざまな強調表現が行われているが、本稿で訳出する際には、1)文頭でない、通常固有名詞扱いでもないにもかかわらず大文字はじまりの語は太字 2)イタリックは下線つき 3)引用符付き語彙は〈 〉で括るというかたちで統一している。

わかるかしら、はっきり想像できるかしら、冷たい人間とはなにか？ 冷たい精神、冷たい魂、冷たい身体とはなにか、すべてが冷たい存在とはなにかを、即座に？これは死とは異なります、なぜなら人間のうちにこそ、この冷たさの感覚が、〈火傷〉が隣り合って棲んでいるから、そうとしか言えない。死は、もしそれが単純な無であるのならはまだよいのです。死の冷たさは、あらゆるあたたかさの欠如というだけ。だけどこの冷たさは、濃縮された空気の冷たさ。生はダンテの煉獄の生のごとくで、そうよ、かの氷の湖のなかにあるのです。

(68)

冒頭近く、ギッピウスが始める「冷たい」人間の議論は、後に見るとおりこの日付書簡全体の

主題である一方で、いささか唐突の感もある。しかし、当時の文壇におけるギッピウスの人物像を考慮すれば、大いに頷けるものでもある。なぜならギッピウスは、詩人としては当初「頹廢的」と評された作風で、文芸評論家としては辛辣なその批評スタイルで、また文芸サロンの率直な女主人としてのプレゼンスで、華やかでありつつ冷ややかな新世代の文壇のヒロインのイメージを多分に背負っていた。だがなによりも彼女の「冷たさ」を決定づけたのは、その容姿や恋愛・結婚、性生活をめぐる周囲の風評と、本人によるジェンダー・パフォーマンスである。

結婚当初、白い衣装と、編んだ髪を垂らすロシアの伝統的な処女の髪型を維持したのは、先にも触れた、彼女の性生活を伴わない結婚（当時「白い結婚」と呼ばれ、文壇にも実践者が多かった）のスタイルを、自ら喧伝したものと言えようが、そのこともあって「白い悪魔」と綽名されたギッピウスをめぐる性的なイメージは、さらに複雑で多面的だ。

既婚者でありながら処女であること。と同時に、自由な婚外恋愛を享受する世紀転換期の「宿命の女」であること。多くの男性の恋人を持ちつつ、女性との恋愛にも熱中したこと。けれどもこれら幾多の恋愛は、どうにも観念的な、身体性を感じさせないものであるらしいこと。つまり、やはり肉体の純潔は保たれているということ。衣装や髪型、メイクに配慮し、ときに悪趣味なほどにフェミニティを強調する、過剰なまでの女であること。一方で、長身瘦躯の少年のような体型、男装を実践し、自ら両性具有性を強調すること<sup>(3)</sup>。

結婚や異性交の制度を超え、性的に解放され自由でありながら、誰よりも現実の性から遠い。誰よりも女でありつつ女ではない。矛盾するイメージが、ギッピウスの実像と虚像を往還しながら、いよいよ虚と実を一体不可分にしていく。それはギッピウス自らが演じ、かつ周囲が、この時代の女性詩人に期待した特別な役割の遂行でもあった。そしてこうしたギッピウス「神話」を完成するのが、彼女が実際の半陰陽であるという文壇内の風評である。文字通り半男半女の肉体であるという説明は、彼女の安定しないセクシュアリティを理解するのに都合がよかったであろうし、また、異形の「冷たさ」をそこに読みこむことにもつながった。冷たさは、彼女という人間の印象であると同時に、彼女のなかの一見して人間的ではないなにかの、しるしでもあった。

ギッピウスと非常に近く交わり、後に決裂した思想家ニコライ・ベルジャーエフの回想は、彼女をこのように描く。

[...] ジナイーダ・ニコラエヴナを、私は非常に並外れた、だが痛ましい人間だと見なしている。彼女の蛇を思わせる冷たさは、いつも私にショックを与えたものだ。彼女には、人間の温度が欠けていた。明らかに、女性的本質と男性的本質が混じり合い、どちらがより強いが見定めることは困難だった。真の苦悩がそこにあった。ジナイーダ・ニコラエヴナは本質的に不幸な人間なのだ。(Бердяев 162)

「蛇を思わせる冷たさ」を包み、「人間の温度が欠け」「女性的本質と男性的本質が混じり合う——これはおそらくギッピウス本人の自己像とそう遠く隔たっているのではない。だからこそ彼女はこのフィロソフ宛書簡において、自己の愛とセクシュアリティを「冷たさ」をキーワードに語ることをやめない。

私は冷たい、あるいは私たちは冷たい、私たちは純粋に冷たい。人への、人びとへの、世界への愛に先立ってあるあらゆる幻想、永遠に感知し、感知され、運動し続けるなにかを私たちは欠いている。私たちには憐憫も柔和さも優しさもありません。よってこの苦悩がある。[…] 冷たい者にも、その者なりの愛があります。骨に似た、歓びではなく苦悩においてのみ感知できる、自己の欲望のための、巨大な、そしてのろまで古びた愛が。私はそんなふうにもミートリー [夫メレシコフスキーを指す] を愛し愛してきたのです […] (69-70)

ギッピウスは「冷たさ」のイメージの系列を展開して、「冷たい人間」の苦しみを語り続ける。「私のなかの冷たい火傷」(68)「冷たさの苦悩、焼けるような冷たさ」(70)と、冷たさが極点に至って熱に転じ皮膚を焼く、燃えるような痛みを表現する。「私の煉獄、氷の湖」(68)と彼女に名指されるその苦悶は、先にも言及されていたダンテ『神曲』中の煉獄、氷にとらわれた罪人の永遠の苦しみにも喩えられるほど苛烈なものなのである。

とはいえこの痛みからの救済の可能性をも、ギッピウスは示唆する。それは「神-愛」「道であり真理であり生命である」「湖を融かす太陽である愛」(69)にはかならない。「冷たい」というのは愛や官能と無縁であるということではない。だがしかし、ここでも絶望をもたらすのは、「冷たい人間」の愛が、望まれた救済をもたらす愛ではない、ということだ。

[…] もっとも冷たい人間がもっとも淫らであるというのは、たいした発見ではありません。 […] なんら意識せず、本能的に、ただ肉体のためにせよ、醜い愛であってさえも、私たちは救済を探す。どうあっても愛の〈ごときもの〉の側のなにかを。でもそれは氷の湖を照らす太陽の光ではなくて、乾いて冷たい一撃、どこか尖がっていて、そのために氷がめきめきと割れ、氷片や氷柱が身体へ突き刺さる、そして冷たさの苦しみはいや増すばかり […] 多くの人が触れもしないこうした肉欲を、むき出しで冷たいほんものの肉欲を、私は越えたのです。 […] 肝心なのは、肉欲はそれ自体、冷たさであって炎ではないということ。冷たい身体の中の、束の間の無力な冷たさ、また冷たさ。それは官能でないばかりか、官能の欠落でもない、言ってみれば反-官能のような […] (70-71)

先に「湖を融かす太陽である愛」を——すなわち冷たさに勝利する愛を——救済としたギッピウスは、ここでそのイメージを暗転させている。つまり「氷の湖を照らす太陽の光ではな」い冷たい人間の官能は「乾いて冷たい一撃」、氷片や氷柱を容赦なく身体へ突き刺す、苦痛をいや増す肉欲であると。肉欲は「冷たさであって炎ではない」と。

ここで注目したいのは、「官能」をめぐる言及である。「冷たい身体の中の」「また冷たさ」であるところのそれ、つまり冷たい人間の淫らさ、「愛のごときもの」の一撃、苦しみをもたらす肉欲は「官能でないばかりか、官能の欠落でもない」。「反－官能」である。では「官能」と「反－官能」をわけものとはなにか。

書簡におけるギッピウスの回答は、かなり明確である。官能には2種のものがあり、ひとつは通常の官能、もうひとつは、「至高の者より来る」「至高者のまなざしのもと」(71) 官能である。ありふれた官能には常に「このむき出しの、冷たい肉欲の糸」(71) が入りこんできた、だが至高者に由来する官能には「どれほど細かろうと、肉欲の糸などありえるでしょうか？」(71)。一方で、「ありきたりの官能を発動させるのは肉欲」(71) である。「とうに明らかなおとり、肉欲なしでは子は生まれない」(71) とギッピウスは続ける。

ここでギッピウスが持ち出す「子を生むこと」すなわち生殖のテーマについては、いずれ戻ることとして、ここではひとまず、至高の官能と通常の官能が区別され、対置されて、彼女の冷たい官能は、もちろん通常の官能に属するものであるということを確認しておこう。もっともギッピウス自ら続けて、「私には生殖の感覚はなく、官能もない、むき出しの肉欲」(72) を分かちあうのみと述べる通り、少なくともこの書簡における「官能」とギッピウスの関係は一定せず、そして「官能」の厳密な定義は2つのカテゴリーのあいだをときにゆらぎ、だが最終的には「至高者より来る官能」が唯一のものとして残り、ありきたりの官能は「反－官能」として対岸の彼方へと放逐される。では至高者に帰する（真の）官能は、いかにして可能か。それはやはり——というべきなのか——ギッピウスとフィロソフ、そして神との三者の関係にかけられている。以下の引用は、「至高の官能」がギッピウスに開く三位一体の境地、その予感を語るものととらえるべきである。

[...] けれどもしばしば私にはこんなふうに映った、思われました。すなわちあなたとの関係において、あなたとともにあるとき私は、私がキリストのそばに、そのまなざしのもと、まさしく彼のそばにあるときに私になしえることと、そっくり同じことをなし、感じるはずなのだ、と。(71)

この引用で「感じ」と訳した動詞 почувствовать は、これまで「官能」の訳語をあててきた чувственность と同じく、名詞 чувство「感覚」の派生語である。чувственность にはほかに、「感

覚的なこと」「感性」「感受性」の意もある。「冷たい」「熱い」といった感覚・感性の領域の語彙を用いることによって、感覚的イメージの展開を通じて性を、自らの官能を語るというギッピウスを選択は、むろんきわめて自然なものと言えるであろう。そして愛人と神との三位一体の境地に至りつくことは、神を感じずという聖なる至福、と同時に極限の感覚、(通常の官能とは異なるかたちの) 性的な絶頂の経験でもあったのだ。

彼女は「冷たい人間」である自分の、フィロソーフォフへの稀有の欲望の瞬間を、「ちっぽけな火花、あなたへの私の聖なる感覚の、短すぎる瞬間」(70)と表現し、「氷の湖」に閉じ込められた己にとっての火、すなわち愛の不可能性と、なお残された愛の顕現へのわずかな期待を「ちっぽけな」という語に込めて綴る。それは上記引用に見る通り、神を含めた三者のあいだの官能としてのみ、実現することになるだろう。さらに引用するならば、

聖なる感覚の瞬間と、私は言いましたね、実際に私はそう感じていたのです。それはすべて神のなかにあって、神から出て神を貫き、神の前にありました。その感覚は成長し続け、あなたのなかにとどまることなく、あたかもただあなたを貫いて、あなたを通りすぎたようでした、そして精神と魂と肉体に触れたのです。(70)

こうした十全たる恍惚の瞬間は、神の介在という事態を前提にしてなお、けっして徹頭徹尾霊的な、身体性を欠いたものではない。ギッピウスは「もっともリアルでフィジカルな、神と世界の感覚」(74)に言及する。続けて、「精神、魂、肉体は私にとって、わかつてはしないもの」(74)と断言する。神と世界の感得は、肉体に属する感覚と感性なしにありえない。そしてギッピウスにとって、愛することが神や世界の感得と通じているのであれば、愛もまた、肉体的なものであるほかはない。「そもそももし肉体で〈愛する〉ことができなければ、精神で、魂で、どうやって愛を感じる чувствовать というのでしょうか。愛の感覚 чувство はまさに肉体的なもの」(74)なのである。

と同時に、先に見た通り「肉欲はそれ自体、冷たさであって炎ではない」(71)。とすれば、愛を感じる肉体は、肉欲、情欲とは、切り離されてしかるべき、ということになる。この論理を理解するには、肉欲とはすなわち生殖の欲望であると位置づけつつ、人類の未来にとって生殖は克服すべきもの、とするギッピウスの思想に、若干でも触れておく必要があるだろう。ここまで読みといてきた書簡に先立つ、同じくフィロソーフォフ宛て1905年の書簡(3月あるいは5月の書簡と推定される)には、以下の一節がある。

[...]である以上、性交は、維持されるのではなくて、消える、そう考える、はるかにたくさん  
さんの根拠があると、私はさらに申しましょう。鎖を断ち切らねば、原因と結果を断ち切っ



て、そこに身体の変容という究極の奇蹟を成し遂げねばならない。性の行為というものは、後ろを、下を、つまりは種の生殖と出産のほうを向いている。出産をやめることはいきおい、行為をもやめること […] (67)

同書簡には、メレシコフスキーの見解を含めて、性愛そして生殖の未来についての議論が各所に見られる。書簡には、その前年に発表された、ギッピウスのこの時期の性愛思想を端的に示す評論『愛するということ』（«Влюбленность»）の反響が随所に感じられ、その意味でも興味深い。そして『愛するということ』と、本書簡中の関連する記述、その思想をあえてひとことで要約すれば、生殖と死という生物としての無限のサイクル、この宿命の外に出る、そのための愛の変容をめざす思想である、ということになる。

『愛するということ』は、当時ギッピウスの周辺で盛んに議論されていた「キリスト教と性愛」の問題に取り組む評論だが、主な論点を以下に抽出すれば、まずはキリスト教的禁欲と、キリスト教会（ここではロシア正教会）が維持する結婚制度への懐疑である。精神と肉体を乖離させ、霊性を志向するがゆえに肉体への嫌悪を煽るその禁欲思想と、生殖を保証する現世的な妥協策としての結婚にかわる、新しい性の感覚（それが *влюбленность* と呼ばれる）の探求が求められる。では、この「新しい性の感覚」はなにをもって新しいのか。第一に、それが肉体を否定せずに肉欲をのりこえる愛であること。では肉欲はなぜのりこえられなければならないか。それがすなわち第二の肝要な点だが、肉欲は生殖を駆動する欲望であって、生物的な種、あるいは生物の典型に属している。だがしかしキリスト教は種や典型ではなく、人の「個」の確立を目指す。このキリスト教的「個」の発見が、性と生死の桎梏にあって無人称の存在にとどまっている人間の、今後の真の「個」の確立を、そして未曾有の性と身体の変容をもたらす<sup>(4)</sup>。

書簡に戻れば、われわれはすぐに同様の、つまり「個」あるいは「無人称」「種」といったキーワードを見出すことができる。

[...] 性交はすべてのつがいに共通、同じであって、そこで個の差異などは深みのない一時的なもので、性交の根本は、無人称であり、同一性であり、種です（性交は出産と結びついている）。性交の同一性、相似、類似、そして法、そうしたもののたちが結局は個を食い尽くしています [...] (64)

であるから、あなたが〈典型〉である以上、あなたは法のもとにあり、死すべき者で、多のなかで他と同じ、けれども個であれば、あなたはどこにあって個であり続け、どこにあってそれを発揮し、示し、たぐいまれなかたちにすることができる。法がもたらす同一の性、性交の苦しみとは、傷つけられた個の苦しみ、神から、キリストさえからも遠ざかることな

のです。あなたが個であれば、あなたの唯一の2が、あなたの結びつきと接近が見えてくるのです。行為であれ（出産を伴わないところの）それともなにか別の、瞬間に過ぎていくもの、なんであれ、それは永遠の二者の秘密、二者それぞれの、と同時に一体となった二者の、とこしえの、そこではだって、ふたりは無限に触れているのですから。（65）

生殖をのりこえる意志は、生殖と表裏一体であるところの死の超克に当然通じており、その結果の、あるいはそれを成就させるであろう身体の変容の思想をもって、キリスト教の枠組のなかでユートピアを構想したロシア思想史の強力な系譜に、ギッピウスもまた、属していることを示す。そのヴィジョンの具体性の乏しさについてはおくとして、本稿の目的に即しての考察が続ければ、ギッピウスの言う「湖を融かす太陽」、冷たさに勝利する愛の要件は次のようになろう。第一に、生殖に向けられた愛ではないこと。第二に、その愛が「個」を損なわず、逆に「個」を覚醒させるものであること。これは第一の点とも本質的に関わっている。なぜなら、生殖に向けられた愛は結局、種の存続の宿命に個を奉仕させる、出産と死の輪廻、そのなかで人を、顔の见えない、無人称の存在にとどめおくものであるからだ。ギッピウスは書簡中で「個の結婚」（65）という言葉を用いて、神の介在によって結びつく二者が、それぞれ徹底的に個でありながら、神を介するがゆえに一体となる、という愛について語る。それは通常の官能よりも十全に、愛を交わす二者間の融合——と同時に愛の主体であるふたつの個の不断の立ち上げ——という神秘を実現する。続けて7月16日付書簡から引けば、

[…] いまこそ私はある極めて大事なことを述べなければならない。いよいよ明らかになっていくのは、〈二者の秘密〉は性よりも広大だということ。秘密は性を含むけれども——もしかしたら、だけど——性によって汲みつくされることはない。もしあなたが違うというなら、性は、私たちがこれまで理解してきた、いま理解しているものよりも広大なのでしょう。性はなんといっても、精神・魂・肉体の一部ですもの。だけどもすべての〈秘密〉、一者の、二者のあるいは三者の秘密であれ、それに対しては、人びとは完全に身をゆだねるのです。  
[76]

性よりも広い、性を無化しうる二者の秘密、完全な融合の神秘。それはいったいどのようなものか。書簡の書き手であるギッピウスは、「出産を伴わない」行為、「それともなにか別の、瞬間に過ぎていくもの」によって「無限に触れ」ることと（65 前出引用より）、それを説明していた。これは具体的にはなにを指すのか。

ここでギッピウスが「接吻」を、生殖に寄与しない、肉欲とは切り離されつつ肉体を否定することのない愛の様式として高く評価しているという事実を、思い起こすことは有意義だろう。評



論『愛するということ』には有名な「キス論」というべきくだりがある。すなわちキスは、性器結合を目指す交接とは異なり、愛の両主体、ここでは男女をさすのだが、両主体のあいだに権力関係を生ぜしめない愛の交感、男女を対等に保つ真にキリスト教的身体技法である、と。これは同時期の日記形式の手記『愛の物語』（«Contes d'amour/ Дневник любовных историй» (1893-1904)）でも繰り返し述べられる、この時期の彼女の性愛哲学の柱となる考え方である。

すなわち、キスという皮膚と皮膚の瞬間の接触、戯れ、浸潤。ひとつになりながら、依然として二者である対等な個と個の融合。「冷たさ」を感じる、そして「冷たさ」がときに熱に、あるいは痛みに転ずる皮膚の上で起こるなにか。接吻。

## 2. 目から皮膚へ。再び光へ——抒情詩を読む

創作者の私的な思いやふるまいが、創作物の唯一特権的なレファレンスたりえないことは自明だが、ギッピウスは自己の人生をも「創った」詩人であったから（前節を参照）、その日記や書簡は、作品たる詩とともに創作物として読まれるべきである。彼女が同時代人たちと取り交わした書簡について評価し、考察する試みは多くなされているが、一例を挙げれば、ギッピウスの「恋人」たちであった詩人で作家のニコライ・ミンスキー、あるいは批評家ジナイダ・ヴェンゲーロワとの書簡のやりとりについて、このように分析する研究者もいる。すなわちギッピウスは恋人に肉体を与えぬかわりに頻々と手紙を書いた。身体に関する語、イメージで構成される手紙は性的接触の代理物である。たとえば女性の恋人ヴェンゲーロワの場合、便箋の色はときに両者の身体を覆うドレスの色を模す、あるいは夢想させて、エクリチュールと身体は相互侵食し、言葉は性交のフェティッシュな代理物となる（Matich 187-188）。

前節の書簡の内容は、当然ながら同時期の日記にその忠実な反響を見出すことができる。しかし本稿で問題にしている皮膚の感覚、冷たさ、熱さ、そして痛みを表現するジャンルとしては、抒情詩を次に考察するのがより妥当と思われる。新詩人文庫版のギッピウス詩集に付した序文の表題を、著者ラヴロフは『ギッピウスと、その詩的な日記』としたが〔Лавров 5-68〕、第一詩集（1903）および第二詩集（1910）にはまさしく独自の皮膚の感覚、性の感覚が、ギッピウスの身体と生をそこに書きこむかのように、息づいている。

「冷たさ」「冷たい」「冷たくなる」холод, холодный, холодетьを含む詩は、第一・第二詩集全163編のうち25編を数え、「涼しさ」「雪」「氷」「酷寒」といった「冷たさ」「寒さ」に関連する語彙をも加えれば、その数はさらに10ほど増える（論者調べ）。明確な判断基準を設定するのは難しいが、これはある程度まで有意の数と言ってよいと思われ、ギッピウスの「冷たさ」への拘泥が推察される。とはいえ本論の目的は、性的な含意をもつ、あるいはその周辺にある表現としての皮膚の感覚に迫ることであって、以下、その観点からいくつかの詩をとりあげていく<sup>(5)</sup>。ただしこれまで見てきたように、ギッピウスにとっての「性」は、狭い意味での性愛の範囲を超え

て、世界を、そして神を感じる／観じる根源として位置づけられていたことを、常に念頭におきながらの分析となる。

まずは、皮膚の感覚もその一部である五感、人間の知覚が、愛の経験において日常の枠組からどのような変容を遂げるか、という例を見てみよう。1903年発表の『愛している?』（«Ты любишь?» 第一詩集所収）は、先に名を挙げたミンスキー、ヴェンゲーロワとの三角関係を濃厚に映した作品で、「第三の人物」としての不在のミンスキーが、いまこのヴェンゲーロワとの一体化のうちに臨在するさまを描いた上で、第4連はこのように続く。

ああ! あなたのなかで、彼のなかでもそうだった／貞節でもなく、裏切りでもなく…／恐ろしく、物憂げな腐敗の匂いがきこえる／あなたの言葉に、身動きに——すべてに (Г. 92)

「腐敗の匂い」とは、本詩中で「死者」と表現されるミンスキーのいわば死臭であり、「匂い」を「きく」という、ロシア語の日常的表現になじんでいるとはいえ、厳密に言えばまぎれもなく共感的な表現は、三位一体の愛の恍惚を、そこでのみゆるされる特別な知覚のあり方を示すものだろう。だがギッピウスの恋愛が宿命づけられるところの「冷たさ」はここにも垣間見え、続く5連の「炎を失ったあなたの感覚」(Г. 92)という表現がそれを暗示する。炎は「冷たさ」の対極であり、情熱の一般的暗喩だが、それはギッピウスの詩学においても同様である。たとえば同じく第一詩集所収の名高い詩『キス』（«Поцелуй» 1903）では、「いかな炎を私がこの唇に残しておいたか」(Г. 126)の一行で、私（ギッピウスの抒情詩の多くがそうであるように男性）による、恋人の誘惑の情景が描かれる。ここで強調しておかなければならないのは、先にも述べたように「キス」こそは皮膚の歓び、個を保ちながらの個と個の融解の思想のアイコンであり、交合を個の消滅として忌避し続けたギッピウス性愛哲学にとっての、抛り所であったことである<sup>(6)</sup>。

同じく第一詩集所収の『お針子』（«Швея» 1902発表）は、ギッピウスの作品に頻出する「編む」「縫う」のモチーフが texture, text にも通じ、文学史的にも女性の詩作、創造の主題を導く比喩として機能する（Эконен 180）との観点で、先行研究においてもとりあげられている（Presto 149-152）<sup>(7)</sup>。3日にわたる完全な孤独のうちに、一心に針を運ぶお針子の語りとヴィジョンが、女性の創造行為、と同時に性的恍惚への飛翔、それへの不安な期待を物語る作品であるが、皮膚の感覚を含めた五感の繊細な描写が際立っている。

軋み、たわむのは燃える紅の絹／ぎこちない針の下で（第2連）

この絹は——私には炎／いまは炎でさえなく——血と映る／血とはすなわちしるし、私たち

が／つたない言葉で、愛と呼ぶものの（第4連）

愛は——ただ音が「……」いいえ、炎でも、血でもない……ただ繻子が／ぎこちない針の下  
で軋むだけ（第5連）(Г. 119-120)

紙幅の関係上引用ができなかったが、本詩中、第一連では背中での痛み、周囲の（おそらく室内の壁の）青いしみ、第二連では教会の鐘の音の描写がなされ、絹の真紅、炎、血の赤を含めた視覚的イメージ、そして鐘とともに、「音」として表象される愛という聴覚的描写が配置される。これに、炎の熱さ、身体の痛み、そして指や針に触れる絹、繻子の軋み、たわみ、なめらかさ、光沢といった皮膚を中心とする混合感覚的要素が加わり、遠くの愛の（待ち人の）音を聴くという、一種の五感混淆の境地が立ち現れる。それこそが、愛への焦がれるような渴望を描くための唯一の方法であるかのように。

論者は以前に『彼女』（«Она» 1906発表 第二詩集所収）という詩<sup>(8)</sup>を分析した際に、レイプをも想起させる描写の続くこの陰鬱な詩において、恐怖のエスカレートとともに、総じて視覚に依存しない身体感覚に関する語彙が優勢になると指摘した（草野 2013）。その第二連は「彼女はざらざらとして、彼女は刺すようで／彼女は冷たくて、彼女は蛇／私は傷だらけにされてしまった、おぞましく熱い／その節だらけの鱗肌で」（Г. 165）であり、「冷たさ」を軸とする皮膚感覚に焦点を当てる本論の趣旨からもぜひ参照したい作品ではあるのだが、ここでは『痛み』（«Боль» 1907発表 第二詩集所収）という詩に触れることを優先したい。前節でわれわれは、冷たさが極まって熱に転じ、身を切る痛み、冷たい火傷（ожог холода）となる苦悩を読みといてきた。痛みは皮膚の近く、その上と下にあって、身体の内と外から痛みを与える、まさに視覚の喪失を伴うような強烈な感覚である。

「赤い炭で闇を描き  
刺すような舌で肉を舐める  
きつく、きつく攣り紐をしめる  
たわませ、碎き、縛り上げる

紐で攣り合わせ  
締め上げて濡らし  
戯れで眠りを破り  
針で刺し貫こう

私はこんなにも善良で  
恋に落ちようとして——吸いつこうと  
優しいコブラのように、私は、  
愛撫を交わし、巻きつこうと

再び絞めつけ、皺くちゃにし  
ねじをゆっくりとねじこんで  
欲しいだけ、かじり続ける  
私は忠実で——裏切ることはない

疲れてしまったのね——私も息をつこう  
傍にさがって、待つことにしよう  
私は忠実、愛を取り戻す  
私は再びあなたへと帰る  
あなたと戯れたい  
赤い炭で描き……」

(Г. 171)

女性の一人称で男性である「あなた」に呼びかけるこの詩は、発表当時、性交の快楽を女性の主語で描いた扇情的作品としてスキャンダルを巻き起こし、それに対して作者ギッピウスが、現実の肉体的痛みを描いたものと主張、1908年発表の評論『獣神』（«Зверь бог. О половом вопросе»）においても、文壇内の女性差別と結びつけて厳しく反論した（Гиппиус, 2003. 330-331）ことがよく知られる。игра（戯れ）と игла（針）、верна（忠実な）と верну（取り戻す）といった、音の近い語彙を続けて配置した言葉遊び、ギッピウスにおなじみの、女性を表象する蛇のモチーフ、そして蛇のとぐろを模すような円環構造など、華やかでわかりやすい技巧とイメージもこの詩の挑発性を強めている印象がある。

さて解釈をめぐる論争をどう受けとめるにせよ、論者はこの詩には、紛うことなき皮膚のコミュニケーション、その快楽と痛みが描かれていると考える。不完了体、完了体を含めた他動詞を畳みかけるように続けて、詩は進行するが、その多くが皮膚の感覚に訴える、皮膚の感覚を刺激する意を持つ動詞であることは説明の要なく明らかなだろう。

全体の円環構造に如実に表れているようにそれは、はじめとおわりを持たない、物語化されておらず目的もない、肌理をすべるような、痛みであり快楽であるような、融解であり離反であるような、主体と客体を序列化することのない（自らの一部である痛みという他者との対話であるならなおさら）、皮膚の表裏の永続する運動である。その点で、この詩を性交ととらえた男性文

学者たちは決定的な過ちを犯していると言える。なぜなら彼らの言う「性交」には、終わりと始まりがあり、男女という階層化された関係があり、性器結合（と生殖）という終点に向けて構造化された堅牢な物語があるのだから。

蛇はとぐろの円環の図像的イメージゆえに、死と再生の主題をも背景におく。それはギッピウスの性愛論に照らせば、いずれ克服すべき、生殖と死の永遠のサイクルを含意しているかもしれない。胎児で満たすべきあたたかい胎に蛇のような冷たさを宿す女としてのギッピウスそのひとは、この宿命を憎んでやまなかったのかもしれない。来るべき霊的および身体の変容によってそれがのりこえられることを求めもしただろう。いずれにせよ、詩『痛み』の皮膚の感覚は、身体のいわば深奥に組み込まれた、愛と生と死の永遠の反復構造から自由で、身体を表層に遊び、戯れ、その構造に亀裂をもたす。そのとき、脱皮して皮膚を更新し続ける不死の生命としての蛇は、身体の変容の象徴ともなるだろう。

だがそのヴィジョンの表現は、もちろんのこと多様であってしかるべきである。最後にあえて、皮膚ではなく、視覚の復権を象徴する光の勝利が、あの「冷たさ」を融かして、人の理性を超えた愛の段階を示唆し、エロスの昇華の光景を現出するべつの作品を見ておこう。1906年の作、第二詩集所収の『午前2時を過ぎて』（«Час третий»）である。全11連のうち前半の6連を訳出する。

三度私の愛は試された

勇敢に闘っているのは……愛そのもの、私ではなく

最初に立ち上がったのは、不可解で鈍重に不吉な身体

盲に生まれついた身体は、見ることを望んでいなかった

猛然と抗い、斃れていった身体

けれども愛の光の意思が——身体を照らし出した

次には思慮ない魂が——またしても盲目の力が——

慣れ親しんだ軽蔑と冷たさを育てた

だが熱い意思に痛烈な氷は融け

たとえ雨裂は冷たかろうと——桜花は咲こう！

ああ二度試された者よ、三度目の前に戦慄するがいい！

輝く炎と燃える、仮借なきわが理性が立ち上がる！

(Г. 163)

愛を三度にわたって試すのは、第一に身体、第二に魂、第三に理性である。まずは盲目を宿命づけられた身体、次に盲目の力をふるう思慮ない魂が、愛の光——大文字で記される愛とはすなわち神の介在を得た愛である——によって蒙を啓かれ、光を取り戻す。愚かな魂が育む「冷たさ」の水は融け、花を咲かす。詩の後半は、聖なる愛が、第三のそして最大の敵である人間の理性には屈しないこと、愛を生んだ創造主そのひとが愛の守護者となって来臨する期待を語る。光を得る身体と魂、神的な愛の前に無効化する人の理性という構図は、宗教的没入のうちに身体もろとももの霊的変容を目指したギッピウスの愛の思想に合致するとともに、前節で確認した、書簡中の「神とあなたと私」の愛の境地を想起させる。冷たさを打ち負かす、あの愛の境地を。

このように、「冷たさ」の克服はときに神の光に賭けられるとはいえ、だがギッピウスの思想と創作に、皮膚の感覚が大きな意味を持っていることは、本論において十分に証明できたと考える。丁寧に皮膚の上と下の思考と表現の運動を追って、ここではとくに「冷たさ」、そして熱と痛みの感性が、生と性を感じる／観じるさまを見てきた。感じ考える皮膚が、他の知覚と運動し、あるときは前景化し、またあるときは後景化するさまを見てきた。そしてそれがギッピウスの詩学において、必然である理由を、述べた。

#### 注

- (1) とくに草野 2012を参照。
- (2) 以下、ギッピウスのフィロソーフォ宛書簡のテキストは Pachmuss, 1972に基づき、本文中で引用する際には、拙訳の上、引用文末尾の括弧内にページ数を記す。
- (3) ここに素描するギッピウス像については、草野 2016「詩人ジナイダ・ギッピウスについて——ロシア文学のティア・リーディングのために」にさらに詳しい。
- (4) 評論『愛するということ』のテキストは Гиппиус, 2003 収録のものを使用した。なお、本評論のさらに詳細な読解は、草野 2016「ジナイダ・ギッピウスの『聖なる血』再考」で行っている。
- (5) 以下、ギッピウスの抒情詩のテキストは Гиппиус, 2006に基づき、本文中で引用する際には、拙訳の上、Г の略号とともに引用文末尾の括弧内に (Г. ページ数) と記す。なお訳詩中太字の単語は、原詩中行頭でないにもかかわらず大文字始まりで表記される普通名詞。
- (6) ただし草野 2013でも論じたが、詩『キス』における、徹頭徹尾主体的な男性と受動的な女性のあいだのキスは、むしろ忌避される性交そのものの隠喩であるとする見方もある。
- (7) ただしプレストはこの『お針子』で、エロス、あるいは宗教的達成に向けられる女性の創造の比喩「縫うこと」は、そのポテンシャルをいかせず途絶すると指摘。(Presto 152)
- (8) 同年発表の同名の詩もあるが、ここでは «В своей бессовестной и жалкой низости,» で始まる作品を指す。

#### 引用・参考文献

- Бердяев, Н. 1989. Собрание сочинений. Том1. Самопознание. Опыт философской автобиографии. Paris: YMCA-PRESS.
- Гиппиус, З.Н. 1999. Дневники. В 2-х т. Том 1. М: Интелвак.
- Гиппиус, З.Н. 2003. Собрание сочинений. Т.7. Мы и они: Литературный дневник. Публицистика 1899-1916. М.: Русская книга.



- Гиппиус, З.Н. 2006. Стихотворения. (Новая библиотека поэта). СПб.: Академический проект, Издательство ДНК.
- Лавров, А.В. 2006. «З.Н.Гиппиус и ее поэтический дневник» // Гиппиус, З.Н. Стихотворения. (Новая библиотека поэта). СПб.: Академический проект, Издательство ДНК.
- Эконен, Кирсти. 2011. Творец, субъект, женщина: Стратегии женского письма в русском символизме. М.: Новое литературное обозрение.
- Match, Olga. 2005. *Erotic Utopia. The Decadent Imagination in Russia's Fin de Siècle*, Wisconsin: The University of Wisconsin Press.
- Pachmuss, Temira. 1972. *Intellect and Ideas in Action. Selected Correspondence of Zinaida Hippus*, München: Wilhelm Fink Verlag.
- Presto, Jenifer. 2008. *Beyond the Flesh. Alexander Blok, Zinaida Gippius, and the Symbolist Sublimation of Sex*, Madison, Wisconsin: The University of Wisconsin Press.
- 草野慶子 2016「詩人ジナイダ・ギッピウスについて——ロシア文学のクィア・リーディングのために」// 小林富久子・村田晶子・弓削尚子 編著『ジェンダー研究／教育の深化のために——早稲田からの発信』彩流社 2016年 35-50頁
- 草野慶子 2016「ジナイダ・ギッピウスの『聖なる血』再考」// 早稲田大学大学院文学研究科紀要 61輯 第2分冊 2016年 87-100頁
- 草野慶子 2013「ジナイダ・ギッピウスの『愛の物語』と初期抒情詩におけるナルシズムの主題」// 早稲田大学大学院文学研究科紀要 58輯 第2分冊 2013年 107-121頁
- 草野慶子 2012「三人の結婚——近現代ロシア文学におけるジェンダー、セクシュアリティ」// 塩川伸明・小松久男・沼野充義・松井康浩編『ユーラシア世界』全5巻、第4巻「公共圏と親密圏」東京大学出版会 2012年 99-125頁